諸君に、大同団結する目標はあったか?

志がなければ、〝小異〟ばかりが気になる

『夢甲斐塾』の所定の研修期間を修了して、出発式まで終えた人達に、その後も何回も手紙を出すのは、初めてのことです。中には、「終わったことだから、もういいのじゃない。放っておけば」と言う人もいるだろう。しかし、私は、とてもそんな風には思えません。むしろ、気になって気になって仕方がありません。まして、歓喜のうちに出発したのならまだしも、塾生同士が反目し合いながら出発式を迎えるなど、私にはとても耐えられないことです。だから、しつこいほど手紙を出しているのです。

どうやら、私の一人芝居だったようです

残念ながら、私がそんなに執拗な思いを持っても、諸君の心に私の思いは届かなかったようです。過去に二回手紙を出しましたが、返事をくれた人はたった一人だけでした。後はまったくなしのつぶて。〝一人芝居〟、そんな思いが、何度も私の頭をよぎりました。どんな形であれ、塾長からの手紙を受け取れば、「確かに受け取りました」くらいの返事をするのが社会人の常識ではないかと思うほどに、まったく諸君から反応がないことが、残念でならなかったのです。

そのことを先輩の一人に漏らしたら、すぐに我が家まで謝りに来てくれた人もいました。また、経過を報告する電話をくれた人もいました。それでも、三人です。後の人達は、どんな風に受け止めているのだろうかと、今もって悩むばかりです。

山梨の県民性を目の当たりにする気がした

私に電話をくれた人は、「今、色々な方法を講じて、みんなの意見を聞いています。ただ、好き嫌いもあり、いっぺんにはまとまりません」と現状を教えてくれました。私は経過の説明を聞いているうちに、「まさに山梨県人の県民性の表れだ」としみじみ思いました。〝出る杭〟を育てるはずの『夢甲斐塾』で、相も変わらず、小異にこだわり、お互いの間に溝を作り、杭を打ち合っているのです。

山梨の人達と十四年間お付き合いしてきて、私は、諸君のような若い人達にも、心の中に、〝内なる講意識〟が根強くあることを知りました。お互いに徒党を組み、内なる仲間とは通じ合う半面、他の仲間に対しては排他的。小さなグループで固まり、他のグループとは反目し合う。小異にこだわり、大同団結できない県民性を、今回も目の当たりにした気がします。

※裏に続いています

『夢甲斐塾』は、その県民性こそが山梨の発展を阻害していると考えて、思い切ってそれを打ち破る人を育てようと志したのです。しかし、残念ながら、十三期生は県民性の枠を越えられなかったようです。

どんなに話し合っても、違いばかりが気になる

それを解決するにはどうしたらよいか、それを考えてほしいと思って、「諸君の出発を認めない」と言っているのです。何度、膝を突き合わせて話し合いしてもダメです。本音を話し合うために酒でも飲もうものなら、終わった後には、喧嘩でもしかねない関係になっているでしょう。問題はそんな所にはないのです。人は、理念、思い、志が共通でなければ、求心力が生まれないのです。目指すべきものがはっきりしていないから、お互いの違いばかりが気になるのです。

私達は何のために『夢甲斐塾』に集い、一体何をしようとしているのか、その原点に立ち返ってください。意外に、そんなものは何もなかったのかもしれません。だから、小異ばかりが目につくのです。小異が気になるようでは、何度話し合っても無駄です。小異を越えられる大同すべき目標、夢、志は何か。本当にあったのか?

これからが本当の研修です

もしこれから本気で話し合うのなら、それをしっかり考えてほしいのです。

富士山に登ろうという共通の目標があれば、一人一人の違いはあまり気になりません。むしろ、仲間としていかに助け合うかを考え合うでしょう。富士山に登るという目標がなく山を登れば、「彼は歩くのが遅い」「彼は手抜きしている」「彼は周りの人のことを考えない」などと、お互いの批判ばかりが出て、収拾がつかなくなるでしょう。

研修期間は終わりました。しかし、今回私が問題提起していることこそ、本当の研修課題です。引き続き、研修のつもりで、是非、「私達には本当に志があったのだろうか」と厳しく自己反省してください。

『夢甲斐塾』
塾長　上甲　晃